

3. 1 大学発足への準備

終戦直後から占領軍総司令部（GHQ）は日本の教育体制の抜本的改革に取り掛かり、教育基本法の見直しを命じた。これを受けて昭和 21 年（1946）1 月、文部省は「大学設置委員会官制」を公布、7 月「大学設置委員会」と改称し以降大学認可の実験を持つ体制を整備した。なお「設置委員会」は東工大学長の和田先生を委員長に、常任委の一人に横浜経専校長の糸魚川先生を含む 45 人の体制であった。

一方横浜工専の富山校長は工科大学（単科）案を掲げて昭和 22 年「設立委員会」、「大学準備委員会」更に、鈴木前校長や産学の有識者を巻き込み {人事委員会} を編成し検討を重ねていた。この計画は地元産業界の支持を得て後援会活動も盛り上がった。

その後文部省指令で単科大学案は消え、神奈川師範学校、神奈川青年師範学校、横浜経済専門学校、横浜工業専門学校を母体とした総合大学とした計画を進めることとなった。

推進母体は昭和 23 年末申請書を設置審議会に提出し、9 月 25～26 日一橋大学の上原先生以下の実地審査を受け、10 月 8 日名称問題を解決するという条件付きで承認された。それは文部省の原則即ち国立大学は府県名をつけるという原則に反して、さらに“国立と”いう文字を入れることにあった。県内でも問題となり“神奈川大学”、“横浜大学”ではなく富山校長のとりなしで“国立”を入れて解決したものであったが、東京国立女子大学（現お茶の水女子大）案を認めなかった文部省の反対にあった。ここでも富山校長の粘り強い主張が認められ全国唯一の例外である“横浜国立大学”となった。

ここで富山校長の業績（苦労）を振り返ってみよう。航空工学科の創設、戦後進駐軍との折衝、学校の再興、教授陣の強化、単科大学の立案、総合大学案の立案折衝更に追って述べる大学院問題などその業績は偉大の一言に尽きる。（工学部五十年史、鈴木前校長回想）

（提供 杉本 良樹）